

雑感 「一関の地震に思う」

住職 千坂げんぼう

六月十四日の「岩手・宮城内陸地震」とつさに「宮城県沖地震」がやってきたなと思つた。かねてから三十年前の六月十二日に発生した「宮城県沖地震」再来の確率の高さが喧伝されていたので、何時来るかという思いが継続していたからである。

三十年前のその日、私は短大の授業が終わるとすぐに仙台市郊外にある団地に戻っていた。三男の出産予定日だったので、陣痛が始まれば病院に連れて行かなければならない。夏至が近く、日差しが強い夕刻、長男は棟の前で近くの子供たちと遊び、私と妻と次男はアパートの部屋にいた。

そのような長閑な郊外の団地を突然の強震が襲つた。妻は次男を抱いてテーブルの下にかくれた。私は、五階建てコンクリートづくりの市営アパートが崩れることはないと思つていた。大きなものが動かないことを確認し、台所の窓(三階)から長男が遊んで居る外を眺めた。そこにはいつものようにニコニコとした顔があった。部屋では空のタッパーが一つ食器棚の上から落ちていただけであつた。

その後のニュースで、多くの死者や建物被害が報道された。死者はブロック塀の下敷きになった学童に多く、建物被害は緑が丘など

急斜面を埋め立てて造成した毛地に多かつた。また、仙台市東部の地盤が悪いところに建てられ、基礎工事がしっかりしていないビルも被害が大きかつた。

この経験から、祥雲寺会館の瓦屋根を銅板葺きに変え、地震対策をしていた。また、知勝院の諸施設も基礎工事をする前に地盤調査をした。埋め立て地の知勝院庫裏を建てる際は、その岩盤に届くまでパイルを三十二本も打つた。このような対策をしていたので、



地震で崩れ地肌が見える須川岳

今回の揺れは三十年前より大きかつたが、全く恐怖感はなかつたし被害の心配もしなかつた。

その後、震源が宮城県沖ではなく、知勝院から直線距離で二十キロ弱の須川岳の麓に屹立する祭時山付近と聞いて驚いたが、知勝院では墓地、建物いずれも被害が全く出なかつた。その後、橋が落ちたことで全国的に報道され有名になった祭時大橋付近に行き、大地を裂く地震エネルギーのすさまじさを見た。岩石が大きく引き裂かれ三メートルも道路が陥没しているのである。このような断層に直接巻き込まれたらどんな建物でも相当なダメージを受けるであらう。

その他は急峻な崖が崩れたり、地滑り地帯の山が動いたり、大雨や雪崩でも起きる現象が一度に発生したという印象であつた。恐らく祭時付近では震度7以上を経験したであらう。しかし、付近の建物倒壊がなかつたことは、揺れの質の問題もあるにせよ、「雪につぶされないようガッチリ造っている家は地震にも強い。」という教訓を得たことに他ならない。地震は怖い。されど、耐震の備えがあれば、そう心配することも無い。

一関地方は、地震に強いことを今回の「岩手・宮城内陸地震」で見せつけたのではないか。

日本はどこでも大きな地震の可能性がある。皆さんもテレビ、家具などが飛び出さないよう固定するなど、地震対策をしてください。